

GALLERY



【私の10点】 山本直彰

特集 アートフェア東京2020とART NAGOYA 2020

新連載 **アート松井塾** 卒業制作座談会2020 Part1

3月の全国美術展【美術館／百貨店／画廊】スケジュール&マップ

桜と出会い松を描く



菅原健彦展

3月1日→3月22日
ギャラリーためなが（銀座）⑬



《三春開花》112 × 146cm

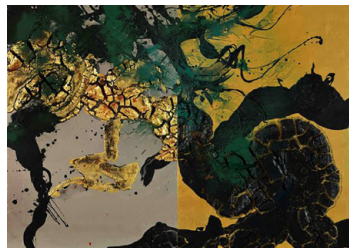
現代における「日本画」の可能性を切り拓いてきた菅原健彦（1962年東京生まれ）。ギャラリーためながで2016年以来、4年ぶりとなる個展を開催する。

多摩美術大学美術学部絵画科日本画専攻在学中の1987年「第5回上野の森美術館大賞展」で佳作賞を受賞するなど、異彩を放つ新人として早い時期から画壇の注目を集めた。93年「第12回山

種美術館賞展」に推薦出品。94年「VOCAL展」出品。95年には「第5回五島記念文化賞」美術新人賞受賞を受賞し五島文化財団研修員として1年間ドイツで研鑽を積んだ。その後も「両洋の眼・現代の絵画展」倫雅賞、「第11回MOA岡田茂吉賞」絵画部門優秀賞など輝かしい歩みを続けてきた。

だが作家が自身の世界を確立する契機となったのは96年、自然豊かな山梨で桜の古木と出会ったことだった。爾来、桜樹への傾倒が始まり、千年を越えて生きる神代桜や淡墨桜の生命力をそれに拮抗する筆致で描いてきた。

ダイナミズムを捉える筆は一方で、花びらや雪などうつろう時のモチーフを繊細に描いた。豪放にして緻密な作品は2012年のギャラリーためながパリ店での個展で世界



《臥龍の松》162 × 224cm

的な評価も得た。現代の日本画としては異例のことだ。今展では、主題に松を加えてからの営為を示す。三春や神代桜、淡墨桜、臥龍の松、霧降の滝などを題材にした新作約40点を出陳する。

越前の手すき和紙の裏から墨をにじませたり、日本で最も古い墨として知られる松煙墨でひび割れをあえて作ったりと、日本画の伝統技法を用いる一方で、常に現代性を更新してきた。それを支えてきたのは、古木の生命が永遠であればと祈る、大自然への畏敬の念だ。